

大都市ひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流

——（その1） 今日会って話した他者の有無と続柄 ——

古谷野 亘¹⁾, 澤岡 詩野²⁾, 本田 亜起子³⁾

1) 聖学院大学, 2) 財団法人ダイヤ高齢社会研究財団, 3) 元・神奈川県立保健福祉大学

第51回日本老年社会科学会大会一般報告, 2009.6.

【目的】 都市部に居住するひとり暮らし後期高齢者の社会関係のうち日常的な他者との交流について検討することを目的とした。

【方法】 調査は, 2008 年 8~9 月に, 東京都杉並区に居住する 75 歳以上の在宅のひとり暮らし高齢者 1,503 人を対象として, 訪問面接法により実施された。調査対象者の選定は住民基本台帳からの無作為抽出によって行い, 地域包括支援センターの専門職が対象者宅を訪問した。同一家屋内に同居者がいる人などを除いた実質的なひとり暮らしは 783 人で, うち有効回答者は 441 人, 回収率は 56.3%であった。

回答者の 16.8% (74 人) が男性で, 平均年齢は男性で 82.0 歳, 女性では 81.4 歳であった。調査対象者には, 前日から調査員が訪問するまでの間に会って話をした他者との交流について尋ねた。

【結果】 回答者の 88.9%が, 前日から調査までの間に調査員以外の他者と会って話をしており, この割合に性差はなかった。しかし, 3 日以上誰とも話していないと回答した人が男性で 8.3%, 女性で 3.6%おり, 男性に多かった。

続柄別にみると, 回答者の 3 割は子どもや兄弟姉妹・親戚などの親族と会って話をしていた。この割合は男性より女性で高かった。女性では 2 割の人が子どもと会い, 1 割が兄弟姉妹・親戚と会っていたが, 男性で子どもと会った人は 1 割にとどまり, 兄弟姉妹・親戚と会った人は

皆無であった(表)。なお, 10 分未満の距離に住む子どもおよび兄弟姉妹・親戚を有する人の頻度に性差はなかった。

親族以外では, 近所の人, 友だちに続き, 店の人, 介護サービスの人と会った人が多かった。

【考察】 社会的孤立が指摘される大都市住宅地域のひとり暮らし後期高齢者であるが, 本研究によれば, 極度の社会的孤立をうかがわせる人は 1 割程度であって, 多くの人は親族以外の他者との社会的接触を有していた。他方, 親族との交流には性差があり, 女性より男性で交流が少ない傾向が認められた。

表 昨日から今日までの間に会って話した他者 (複数回答; %)

	計	女性	男性
親族	28.8	32.4	10.8
親族以外	75.3	74.1	81.1
誰とも会っていない	11.3	10.9	13.5
子ども	18.2	20.2	8.1
子どもの配偶者	6.1	6.3	5.4
兄弟姉妹・親戚	9.5	11.5	0.0
友だち	18.4	19.1	14.9
近所の人	31.1	32.0	27.0
会や団体の人	9.8	10.4	6.8
介護サービスの人	14.1	13.7	16.2
民生委員や役所の人	1.4	1.6	0.0
医師や看護師など	10.7	9.6	16.2
店の人	15.2	14.5	18.9
訪問販売や勧誘の人	2.5	2.2	4.1
よく見かける人	6.1	6.6	4.1
初めて会った人	2.3	2.5	1.4
その他	4.3	4.1	5.4

大都市ひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流

(その1) 今日会って話した他者の有無と続柄

古谷野 亘¹⁾, 澤岡 詩野²⁾, 本田 亜起子³⁾

¹⁾ 聖学院大学 ²⁾ ダイヤ高齢社会研究財団 ³⁾ 神奈川県立保健福祉大学

社会的に孤立しがちだといわれる大都市のひとり暮らし高齢者の、他者との日常的な交流の態様を明らかにすることを目的として、「昨日から今日にかけて会って話をした」他者について尋ねた。

回答者の 88.9% が、前日から調査までの間に、調査員以外の他者と会って話をしていた。

➢ 3 日以上誰とも話していない人は男性で 8.3%、女性では 3.6%。

回答者の 28.8% が、子どもや兄弟姉妹・親戚などの親族と会って話をしていた。

➢ 親族と会って話した人は、女性で 32.4%、男性では 10.8%。

➢ 子どもと会って話した人は、女性で 20.2%、男性では 8.1%。

➢ 兄弟姉妹・親戚と会って話した人は、女性で 11.5%、男性では皆無。

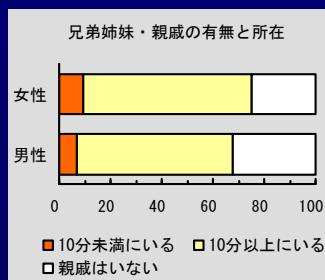
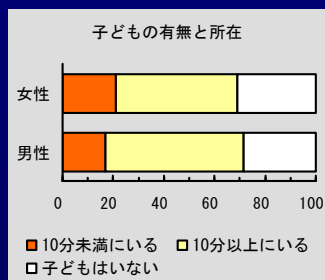
10 分未満の距離に住む親族を有する人の割合に性差はなかった。

回答者の 75.3% が、近所の人、友だち、店の人など親族以外の他者と会って話をしていた。

子ども、兄弟姉妹・親戚、友だち、近所の人、会や団体の人と会って話した人は、男性より女性で多かった。

近隣に住む子どもや兄弟姉妹・親戚を有する人は少なく、そのことを反映して、親族と話した人は少なかった。しかし、近所の人や友だちと会って話している人は多く、極度の社会的孤立状態にある人は少なかった。ただし、非親族によるサポートへの期待は少なく、表面的な付き合いに終わっている可能性が高い。

他者との日常的な交流に関する研究は少なく、今後の課題である。



【方法】

調査は、2008 年 8～9 月、東京都杉並区内の 3 地区に居住する 75 歳以上の在宅ひとり暮らし高齢者 1,503 人を対象に、訪問面接法により実施された。当該地域を管轄する地域包括支援センターの専門職が調査員として対象者宅を訪問した。訪問の結果、本当のひとり暮らし（同一敷地内別棟を含む）は 783 人であることが判明し、うち 441 人から有効回答を得た。回収率は 56.3% であった。回答者の 16.8% (74 人) が男性で、平均年齢は男性で 82.0 歳、女性では 81.4 歳であった。

